

独占欲の檻に咲く

令嬢の絶頂

著者:宵待

義兄からの

逃げられない

愛の執着



独占欲の檻に  
咲く、令嬢の絶  
頂

義兄からの逃げ  
られない愛の執  
着 Vol.1



## 【はじめに】

本作はフィクションであり、強引な描写や背徳的な状況を含みます。苦手な方はご注意ください。

男女目線があります。  
義兄目線の無自覚な執着エロです。

挿絵は、AI生成の挿絵にibisPaintの絵描きアプリでビクビクしてる線を書き足したり、ハート目やハートを飛ばしたり、文字入れアプリCanvaで文字入れをして雰囲気を出しております。  
楽しんでもらえれば幸いです！

## 収録内容

耳元で囁き、耳責め、言葉責め、乳首責め、クリ責め、潮吹き、連続絶頂、ハート目、素又、覗き見。  
クリ責め中心。過激エロ。

新一目線よりゆずりは目線の方がより過激なエロとなります。



# 登場人物

蝶野ゆずりは(ちょうの ゆずりは)

20歳の女子大生。武術に長けた名家の正妻から生まれ美女。外面が良い。  
感情が高ぶると関西弁が出る。

蝶野新一(ちょうの しんいち)

21歳の大学生。ゆずりはの血の繋がらない義兄。関西弁を話すチャラ男。  
ある理由から金髪にしている。  
ゆずりはに無自覚で執着している。

桐生刻夜(きりゅう ときや)

18歳の大学生。ゆずりはの幼馴染。



黒髪短髪紺色の目。クール。  
昔ゆずりはに虐められていたので、ゆずりは  
の事を強烈に記憶している。



「ほら、お前はここを感じるんやで？」

そう言って義兄は、ゆずりはの弱点であるクリトリスばかりを弄り回す。

「ひいっ！？そこ♡らめえ♡♡」

ゆずりはは泣きながら首を振るのに、全然指を止めてくれない。

「何言うてるんや？こんなに固くさせて♡お前はもう俺の指じゃないとイケん体になったんやで♡」

クリクリと摘みやすくなったクリを弄られながらも、直ぐに弾けそうになって、イキそうになると、途端に意地悪く指を止められた。

「ひいいいいいいい———♡♡♡」

イキそうだった時に、指止められるのキツツ！！

この兄、最低だわ！！と睨みつけるが、涼しい表情でニヤニヤされるだけだった。

こんなはずじゃなかったのに！なんでこうなったの！！



# ゆずりは目線

蝶野家、私蝶野ゆずりはは正妻の娘として、生まれてきた。

遺伝子が、武術に長けた名家の血筋の為、男の子よりも力も速さも何もかもが、優れていた。

蝶野家の武術は、薙刀、武術、剣技、レスリング、格闘技など、多岐に渡る。

私も全ての技術を身に着けさせられた。

親が望む姿を見せていた為、チヤホヤされて育った。

昔は親から無能と無視された時期もあったので、そういう事でしか愛されていると確認できなかった。

だから、必要とされるために、涼しい顔をして何でもこなせる女の子。  
そういう風に見せていた。

でも、こんなんじゃないまだまだだと、必死に努力してきた。

県大会優勝、全国大会出場、そして、全国大会優勝、今の私があるのは努力によってである。

お洒落には興味があった。

ただ、武術の選手ということで、髪を長くすると髪を掴まれて不利になるので、短くするのが基本。

しかし、名家のため見た目も気にする家柄で、その為に付け毛を付けることは多かった。

練習に時間を割くために、髪を切るのが面倒臭くて、髪が伸びてることもあった。

お洒落はしていた。

しかし、兄からは雌ゴリラと言われた！



兄は物心ついた時から直ぐ側にいたので、顔は似てないとよく言われていたが、本当の兄だと思っていた。

しかし、蝶野家の血を引いているわりには弱いなあと思っていた。

皆からも馬鹿にされていた。

最近では金髪にしてるけど、元々は黒髪で蝶野家には珍しい髪の色をしていた。

ただ、兄は無駄にプライドは高かった。

兄からはメスガキとも呼ばれていた。

でも、口は悪いけど、お互い様だったので、許せた。

後に、血が繋がってないと聞いても、兄への見方が変わることはなく、兄が髪を染めても特に何も思わなかった。

義兄とは、何でも言い合える関係が心地よかった。

何をしても最終的には許してくれると思っていた。



私が8歳の時に出会った、2つ年下の桐生刻夜。

名家の武術の家柄で、蝶野家の分家の家紋である。

刻夜とは血縁は10親等以上離れている遠い親戚なので、ほぼ他人。

物凄く可愛くて一目惚れした。  
でも、アプローチの仕方が分からず、厳しくして虐めることしか出来なかった。

私的には可愛いから虐めていた。

でも、大きくなってもイケメンなのは変わらなくて、やっぱり好き！！と思えた。

しかし、嫌われているのか、無視されたり、  
ツーンとした態度を取られ続けた。

でも、声をかけ続けた。

「...あ——！！鬱陶しいんですよ！！」

6歳から12年の付き合いなのに、何故か刻夜  
は敬語で話す。

敬語じゃなくてもいいと言っても、敬語を話し  
てきた。

バリバリに警戒されてるのが肌で感じられ  
る。

...接し方間違えた。嫌われてるわ。と落ち込  
んでいた。

もう、刻夜と仲良くするのは無理なのかな？  
と思っていた。

しかし、この二人とまさか、あんな事になるなんて、この時には思っていなかった。

次の日も義兄は容赦しなかった。

最初はクリの皮を被らせたまま弄られていたのに、段々と刺激されて大きくなって行って、その皮から出てきた先端をチョンチョンと触られただけで、体が勝手に飛び跳ねた。

「ひいっ！？」

直に触られると、ビリビリ！！とした快感が走り抜ける。

「いや♡そこ♡も♡ホント♡ムリムリムリ♡」

「んー？分かつとるわ。ここがええんやろ？」

そう言って、固くなってる先端をコロコロと最初は優しく転がすように触られたのに、こっちは逃げ出したくなるほどの衝撃だった。

「いやいやいやああああああー————♡♡♡」

気持ち良くて頭が何度も真っ白になるのに、変な所にいきそうになると、指を離された。

体が勝手にビクビクと痙攣する。

ぶじゅーぶしゅーと潮を吹くのに、掻きむしりたい程の焦燥感に見舞われる。

ムズムズしてどうにかなりそうだった。

その衝動が収まってくると、またクリ責めが始まった。



「ひっ！？な、なんでそこばかり♡♡」

続きはさらなるクリ責め連続絶頂地獄になります！